

「石垣焼」を通じて 島の美しさを、 世界に伝えたい。

石垣島の海を表現したブルーと漆黒の地に銀色の滴模様が印象的な「石垣焼」。陶芸家の金子晴彦さんは陶器とガラスの異素材を組み合わせたという父親が開拓した技法を受け継ぎ、石垣焼を完成させました。今もなお、進化し続けている石垣焼。色に込めた思いやこれからのについて金子さんにお話を伺いました。



石垣焼家元 金子 晴彦さん 62歳

1976年、よらん焼家元を開いた父・金子重八郎のもとで修業を開始。09年石垣市に石垣焼家元を創設。05年日本国際博覧会「愛・地球博」にて三民大賞が贈られる。10年東京サンクエティナホテル「アール・ド・フランス」にて2015（フランス国民美術協会）日本代表に、2部門で金賞を獲得。

見るたびに表情の異なる「石垣島の海を器の中に」。パッと目に飛び込む鮮やかなブルーグリーン「石垣ブルー」と名付けられたこの色は、さんさんと降り注ぐ日の光を受けた石垣島の海を表現しています。石垣焼の特徴である陶器とガラスの融合はとても難しいものです。ガラスが冷えて陶器にくっつく時、陶器はさらに細もうとすするため、収縮率の差で器が割れてしまうからです。自分の思うようにはいかず、めげることもあります。そんな時は、何となくのルンとと一緒に近所を散歩します。毎日同じ海、空、緑を眺めているはずなのに、新たな感動を感じる。それは、石垣島の自然は美しく、また改めてこの色を表現したいという強い思いに駆られるのです。石垣焼の神秘的なブルーがつなげてくれた出会いに感謝。石垣焼を育てたのは、私一人の力というわけではありません。

「器のブルーを眺めて島の海を思い出しています」と喜んでくださるお客様との出会いによるものはとても大きいです。大英博物館に石垣焼が収蔵されることになったのも、こうしたお客様のご縁によるものでした。人と人のつながりが、石垣焼を大きく羽ばたかせてくれたように思います。今は工芸品を作るだけでなく、アーティストとして「KAN EKO」の名で、石垣焼を現代アートとしても発表しています。ヨーロッパをはじめ台湾、フィリピンなどでも展示を行い、ご好評をいただきました。私も身もアートを知らなくて、陶芸の伝統やしぐらみから解放され、作業が自由になりました。アートと陶芸、この二つの舞台を通じて、世界中の人たちにも石垣焼に触れてもらいたい。そして石垣焼をきかへと、石垣島や島の美しさを、もっともっと知ってもらいたい。その思いが今も昔も変わらない、作品を作る原動力となっています。

サントリーウエルネスのお客様にお届けする、すこやかな暮らしへの提案

美感遊創

食のちから
薬膳の知恵で
暑さを乗り切る!

心と体の健康塾
その不調の原因は
温度差に!?

大人の遠足
水族館で遊ぶ

美の心得
夏を乗り切る
三つの“腸バテ”ケア

美の肖像
石垣焼家元
金子 晴彦さん

遊美
創感

